



馬耳東風

現在、我が国には公私立合わせて1,100館以上の美術館があるという。これらの中には、80年以上の歴史を持つ大原美術館、ブリヂストン美術館、国立西洋美術館などを筆頭に、非常に質の高い作品を展示している美術館がある反面、期待を裏切るような館も多々ある。1990年代の初期、戦後の復興が一段落した後から一貫して踏襲されてきた「効率の追求と経済成長の維持」という考え方が転機を迎え、「今後は心の豊かさを追求する社会に向かわなければならない」と言われ、文化政策が一段と進んだ時期があった。この流れの中で各地に競うように多くの立派な美術館が建設された。しかし、時が経ち今となって冷静に観ると所蔵品の購入もままならず、入館者数が低迷し、それに伴い運営費は削減されるなど、所期の目標を達していない美術館が多いと聞く。

美術に限ったことではないが、優れた芸術作品に接することは、日常の緊張感から解放され、心が癒され、豊かな気持ちになれるなど多くの効用がある。その機会を提供する場としての、質の高い作品を展示する美術館を持つ都市はそれだけで文化レベルが高い都市のように感じてしまう。予備知識もなく入った美術館で期待以上の絵画に出逢うと喜びと満足感で帰途の足取りが軽くなる。絵画の好き嫌いには個人差があるので一概には言えないが、筆者にとって、秋田市にある平野政吉美術館（現在は秋田県立美術館）もそんな美術館の一つである。

偶然入った館内が藤田嗣治の作品で埋まっていた。藤田の世界に浸り、興奮冷めやらぬまま館を後にしたのを鮮明に覚えている。その他にも国立近代美術館、鹿児島市立美術館、足立美術館、ひろしま美術館など名画を鑑賞した後の余韻が心地よい美術館が多くある。建設当初、批判された山梨県立美術館は現在ではミレー作品の所蔵館として世界有数の美術館となった。別格の3館もそうであるように、概して個人の蒐集作品を基にして設立された美術館に質の高い作品が多く所蔵されているように感じられる。そこには篤志家の美に対する純粹で強い思いと美を通じて地域の芸術文化レベルの向上に役立ちたいという強い意志が反映されているからであろう。これは欧米の歴史のある美術館でも同様に、多くのものが国王、貴族などの蒐集品を基に設立されたものが多いようである。美術館の良し悪しは箱の大小ではなく、所蔵作品の質、量によって決まると思うが、それは西洋画か日本独自の美術品かは問題ではないだろう。名画は投機の対象として経済の動向に密接に関係して漂流しているといわれるが、経済の高度成長を謳歌した時代に大挙して日本に流れ込んできた名画は、経済の長期停滞期の中にある今、何処へ隠れたのだろうか？ 銀行の金庫に眠るのか、地下に潜ったか、あるいは海外に旅立ったか解らないが、それらの一部でもよいから、美術館で公開される時期は何時来るのだろうか、そんなことを年頭にふと思った。

(青)